# 平成２７年度　心の健康委員会事業概要

**【委員会の開催】**

（１）期　日　　・第１回　　６月２６日（金）
　　・第２回　１１月　９日（月）
（２）内　容　　「心の健康」講演会の計画と事例研修

**【「心の健康」講演会】**

（１）期　日　　平成２７年１１月１６日（月）14:00～16:00
（２）会　場　　羽島市文化センター　みのぎくホール
（３）講　師　　国立教育政策研究所 生徒指導・進路指導研究センター
　　総括研究官　　滝　充　氏
（４）演　題　　「不登校の未然防止と初期対応」
（５）参加者　　１１０名
（６）講演録

**○はじめに**

みなさんこんにちは。国立教育政策研究所の滝と申します。私は、いじめや不登校についてよく話をさせていただいているのですが、本日は、特に不登校の内容で依頼を受けて準備してきました。ですので、いじめの話はあまりできないかもしれません。

最初に、少し参加者の分布を聞かせて下さい。学校の養護教諭ではない一般の先生で、例えば不登校や生徒指導等に関わっている先生は手をお挙げ下さい。養護教諭、保健室で関わっている先生は手をお挙げ下さい。お医者さんや薬剤師さんという方はどれ位いらっしゃるのでしょうか。手をお挙げ下さい。はい、ありがとうございました。

不登校問題というのは、今までもいろいろと問題にされてきました。にもかかわらず、必ずしも減っているとは言えません。むしろ、ここ２年くらいは増えています。その前も減ったとは言いながら、だいたい 10 万人を超えた人数で高止まり状態です。そうした状態の中で、不登校問題って一体、何だろうと考えたとき、本題に入る前に、少しお話しておきたいと思うことがあります。

それは、この会に参加してみえる、教師ではない方、外部の専門家と言われる方々に、どう学校支援をして頂くのがよいのだろうかといった話です。特に、本日は教師の意識と行動というサブタイトルなのですが、学校の先生との付き合い方、関わり方みたいなことを、お考えいただく機会にしていただければと思います。

やっていい事と悪い事などと言いますが、お互いに協力することによってプラスになることがありますね。逆に、協力し合うことによってお互いに責任の所在が曖昧になってしまうことなどもあります。そうならないためには、お互いの専門性がうまく生きて、比喩でいうとオーケストラみたいになるのがよいと思っています。それぞれの楽器がそれぞれの音色でそれぞれのメロディーを奏でていくのがよいわけです。ところが、やっていくうちにみんなが同じ旋律を弾き始めてしまうと、何の為にたくさん楽器があるのかが分からなくなってしまいます。ただ、音が大きいだけという話になってしまいます。

いじめや不登校、発達障がい等に対して、今までは同じ旋律を奏でようとしてきたところがありました。そうではなく、もう少しそれぞれのパートの特性を考えて綺麗に分かれてくると、初めて効果が上がるのかなと思っています。本日は、そんな話になります。

**○不登校問題とは**

最初から意地悪な質問なのですが、不登校の増減に関して誤った思い込みがあるのではないかということでお尋ねします。皆さん、普通にご自分のイメージで考えて、答えてみて下さい。不登校児童生徒数がこの２年程、増えています。不登校が増えるのは、なぜなのでしょうか？

一つの答として、不登校になった児童生徒がなかなか復帰できず、どんどん積み重なっていくために増えていくのではないか、という考え方があると思います。ところが、実はこれは全くの間違いです。実は正解は、「休みがちだったり、全く休んでいなかったりした児童生徒が、30 日以上休むようになったから」なのです。例えば今、30 代く

らいの人でも引きこもりの方がいらっしゃり、ニートやフリーターになっているという話を聞くと、不登校が増えたと言われるのはそうした累積の結果のように感じられるかもしれません。でもそうではないのです。そもそも昨年度の不登校の子供が今年度も不登校になったとしても、数字は１のままで、２に増えるわけではありません。

**不登校の増減に関する誤った思い込み**

○不登校児童生徒数が増えるのは…

✕ 不登校になった児童生徒が、なかなか学校復帰しないから

○ 休みがちだったり、全く休んでなかったりした児童生徒が、30日以上休むようになったから

○不登校児童生徒数を減らすには…

△ 不登校になった児童生徒を、学校復帰させる

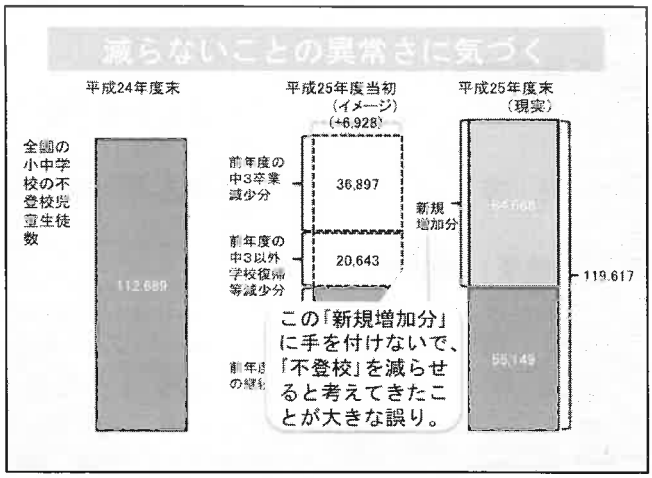
○ 休みがちだったり、全く休んでなかったりした児童生徒を、30日以上休まないようにする

では、減らすためにはどうしたらいいのでしょうか？「不登校になった児童生徒を学校に復帰させる」という答えが出そうですね。それはそれで大事なことなのですが、私的に言うと△で、実は正解は「休みがちだったり、全く休んでなかったりした児童生徒を、30 日以上休ませないようにする」なのです。そもそも不登校というのは、30 日以上休まないと不登校にはならないので、去年不登校の実績があろうがなかろうが、今年の段階で 10 日しか休んでいなかったら、その子供は不登校の子供とは呼ばないのです。

何かだまされているような印象を受けているかも知れません。皆さんが不登校について語るときは、このまま放っておいたら 30 日を超えてしまうかもしれない、あるいは 30 日越えないにしてもきちっと学校に来ることは大変そうな子供、というような、ある種の状態や傾向を指して不登校という言葉を使って会話をされているのではないでしょうか。だとすると、この質問が違う話になってしまいます。

毎年、不登校が減らないとか増えたとか言われていますが、それは文部科学省が各都道府県の教育委員会にお願いしている「問題行動等調査」の不登校児童生徒数が、日本全国で増えたとか減ったとかという話です。その際の不登校の数というのは、今申し上げたような 30 日以上の長期欠席者の中から、経済的な理由、病気、虐待などを除いた残りの部分を指しています。私がお尋ねしたのは、その数字が増えていくのはどうしてなのかという話なのです。

全国の傾向で言うとどうなっているのか。先日、平成 26 年度の数字が確定しました。ですので、ここに示しているのは１年分古い数字になります。




平成 24 年度末の全国の小・中学校の不登校の数は、今ここにありますように 11 万２千を超える数になっています。そして、25 年度当初には、真ん中の上の数（ここでは 36,897）が必ず減ることが約束されています。なぜならば、中学校３年生の生徒が卒業するからです。

多分、皆さんには、特にお医者さんの方などには、非常に違和感がある話かもしれません。「この子たちはここで数字から除外されていくが、ちゃんと元気になったのか？」と疑問に思われるかもしれません。しかし、この子達は中学校を卒業してしまい、中には高校に通っている子もいれば、相変わらず自宅に居て外に出られないという子もいるわけですが、そうした状態に関係なく、この数字からは自動的に除外されるのです。

それに加えて復帰する子供（ここでは 20,643）もいますから、不登校の数というのは毎年半減するのです。どの都道府県でも毎年こんな割合になります。だから不登校の数が増えるということ自体、私は不思議で仕方がありません。不登校は減って当たり前なのです。少なくとも毎年卒業していく子がいるのですから。それにもかかわらず、実際に平成 25 年度末にはどのようになったかというと、この継続分に加えて新しく不登校になった子供（ここでは 64,668）がいます。しかもこの新規増加人数が減った数よりも多くなっているのです。だから実際には 11 万９千という数、前年度末を上回る数になってくるのです。

つまり、不登校が増えるのは新規増加分があるからであり、新規増加分がなかったら不登校は半分になり、半分になり、半分になりというように、どんなに長くかかっても、９年たったら必ず０になります。不登校が増えましたと簡単に言っていますが、皆さんが考えている以上に毎年増えているのです。新規に増えている分を何とかしなけれ

ばなりません。

ここにお集まりの皆様方が、これまで注力されてこられたのは、中学３年生も含め、「何とか学校に戻ってきてほしい」ということでなされてきた取組だと思います。つまり、継続分から少しでも数を減らしていけるようにと、一生懸命に取組をされてきているわけです。けれども、このような取組の多くが新聞報道等の数字の上で実を結ばないのは何故かというと、折角減らしたと思っているのに、また次から次へと不登校にさせてしまっているからです。

では、させているのは誰でしょうか？もちろん、家庭にも原因はあります。けれども、その家庭の原因等に対して十分に対応することができなかった学校の責任というものも問われます。責任がどこにあるかということはそんなに重要ではないのですが、学校として何とかできないものだろうかというあたりを考えていく必要があります。

### ○学校に求められる不登校対策

こう見てくると、不登校は新規増加分が問題であるという話になり、不登校を減らすためには新規増加分を何とかしなければ仕方がないという話になります。まずは新しく不登校にならない取組を行い、次にそれでも不登校になりそうな子供達が少しでも休む日数を減らすようにし、さらにそれでも不登校になってしまった子供達には何とか学校に復帰できるようにと願う。学校に復帰できなくても、将来、高校や大学へ行くタイミングなどで、社会復帰してくれると嬉しいですね。そのために何ができるかというような順番で考えていく必要がある、と私は考えています。

従来の不登校対策というと、どうしても不登校になってしまった子供たちを中心に考えてきました。例えば、普通の病気の中には、本人が努力してどうのこうのとか、周りが努力してどうのこうのではなく、そうなってしまう病気っていうものがあります。多分、遺伝やらなんやらで、10万人に一人いるとか、１万人に一人くらいそういう患者さんがいます、といった話があると思います。

ところが、不登校はそういう身体的な病気とは少し違う種類の問題として考える必要があります。むしろ、少しの働きかけだけで不登校にならずに済む場合は、いくらでも有ります。いじめなどもそうですが、どちらかというと私たちは不登校になった児童生徒に対するケアの話を中心に対策を行う傾向がありました。文部科学省もそうなのですが、都道府県も当然、文部科学省にならってきたところがあります。

もちろん、不登校になった子供たちのケアも大切なので、学校保健会などで皆さんが集まっていろいろと勉強し、そのノウハウに基づいて働きかけていくこと自体はとても重要なことです。しかし、そのことだけをやっていっても、新規で増える子供たちがそのままになっていたら実はきりがないという話になるのです。教育政策等において「不登校が増えた。減らさなければいけない。教育委員会は何をやっているのだ。」という話になり、いろいろな対策やら政策を打ちます。しかし、そういう話と、実際に不登校になった子供に対するケアというのは、そもそも次元が違う話なのです。

**基本的な考え方**

- 従来の不登校対策は、不登校になった児童生徒に対するケアを中心としたもの
- なった児童生徒に対するケアは大切で、これからも続けていく必要

- ただし、それを続けるだけでは、不登校は減らない（そもそも、減らすための取組ではない？）
- そのことは、不登校の児童生徒ではなく、「数字」の推移から明らか
- 「木を見るのではなく、森を見る」視点が必要

- 「不登校」は「生まない」ことこそが大切

いい比喩かどうかは私にも分かりませんし、失礼があったらお許し頂きたいのですが、例えば、かつてライ病の患者がいました。それをどんどん治療して減らしていくと、最後は根絶でき、伝染病として存在しなくなるみたいな発想に立って対策を講じてきたように、私には感じられます。そうした対策がいらないと言っているのではなく、それを増やしていったら最後には不登校が減ると思っていた時点で、大きな勘違いがあったのかなと、私は思っています。

さっきの数字を見て頂くとお分かりになるかと思いますが、個々の子供達だけを見るのではなく、全体の数字を見ていくと、先ほど述べたとおり、新規の対策を行わなければいつまで経ってもきりがない。新たな不登校を生まないということが大切という話になるのです。

では、生まないとはどういうことなのか、この辺が多分、不登校のお子さんと関わってきたみなさんとしては、あまり乱暴なことは言ってほしくないと思われるかもしれません。昔は、（学校の）先生たちに「不登校にさせないで下さい」と言うと、どちらかと言うとこんなふうに考えたのではないでしょうか。「昨年、この子は不登校でした。」－「よし分かった。では、この子が不登校にならないように何とかしましょう。私が毎日、家庭訪問をして、迎えに行って何とかします。部屋から出

てこないようだったら私が『〇〇君、みんなが待っているよ。』と呼びかけます。」といった具合に熱血の先生方がいたりしたのです。しかし、それは多分、みなさんの考える適切な働きかけとは違いますね。

特に全欠に近いような子供の場合、普通に学級担任や教科担任をやってみえる先生方が、いきなりそうやって家庭に行っても、子供が心を開くなんてことはテレビドラマでもない限り無理で、登校するなんてことは考えられない。みなさんのような方がていねいに関わったとしても難しいのに、張り切ってやれば素人でもいいみたいな話ではないと思います。すごく乱暴な言い方ですが、このようなことを普通の先生にやらせてもうまくいくわけがない、と私は思っています。

例えば、どうしてスクールカウンセラーという専門家が配置されてきたのか、あるいは支援センターができたのか、あるいはこの学校保健会というような組織の中でいろいろなお医者さんたちが関わってきたのかということを考えたら、先生たちがそんなふうに首に縄を付けてとか、餌をぶらさげたら何とかなるのではないかということで解決する問題ではないからだ、ということです。

**学校ができること・すべきこと**

〇ケアの専門家ではない教師や学校にできるのは、
・前年度、欠席や遅刻・早退が目立った
・とりあえず、４月時点で登校してはいる
・年度末までに30日を超える可能性の高い児童生徒への働きかけ
→「不登校になりそうな児童生徒」への対応
＝「初期対応」の取組＝「治療的予防」

もう一つは、
〇本来の生徒指導が行うべき、健全育成
→「不登校にならない児童生徒」の育成
＝「未然防止」の取組＝「教育的予防」
⇒リーフ5とリーフ14

むしろ、学校の先生方にして頂かなければならないのは、前年度、欠席、遅刻、早退が目立ったけれど、現時点では学校に来ている子供たちに対して、そのままだと 30 日を超える可能性が高いので何とかしようと働きかけていただくことです。

では、30 日を超えなければいいのか、30 日を越えずに 29 日や 28 日だったらいいのかという話もでてくるかと思いますが、少しでも少ない方がいいということです。逆に言うと、35 日だったらもうダメなのかという話になります。不思議ですが、30 日くらいが経験的に言って一つの目安になります。30 日休むということは、週に１回ずつくらいの見当で休まないと年間 30 日は越えません。しかし、普通の子供、普通という言い方も変なのですが、子供というのは放っておくと学校へ来るものです。子供ってあまり休まない、と私は思っています。普段、休んでいない子供の方を多く見ているからかもしれません。

自分が実家に帰った時に小学校時代の通知表などを見てみると、私は結構、病気がちだったはずだけれど、そんなに休んではいなかったのだな、と思ったりします。欠席、遅刻、早退などは、多くの子供が、０、１、０とか０、０、０みたいなことが圧倒的に多く、10 日休むなんてことは、そんなに簡単にはできません。普通の子供にとって 10 日休むということ自体、かなりなハードルだと思います。そう考えると、30 日を超えるというのは難しく、60 日超えるのはもっと難しいです。

ちなみに、データ的には、60 日を超えてしまった子供が、その翌年学校へ来る可能性は大きく減ります。それについては、いろいろな解釈ができますが、「休み癖がつくからいけない」といった乱暴な言い方もあれば、「学校って行っても行かなくてもいいんだという感覚になる」とか、「学校から離れれば離れるほど馴染みにくくなるから」なのか、それは分かりません。しかし、60 日を超えるときついという数字が出てきます。そういう意味で言うと、30 日くらいを目安に頑張っていくというのは悪いことではないと思います。小学校では、15 日を超えたら大変くらいのつもりで、先生方が普段から子供に関わっていく方がいいのかなと思ったりもします。

そうした不登校になりそうな児童生徒への働きかけを、私はよく「初期対応」と言いますし、場合によっては「治療的予防」という言い方もします。それに対して、学校の先生方にしていただきたいもう一つの働きかけが、「未然防止」や「教育的予防」です。本来の生徒指導が行うべきことに健全育成がありますが、不登校にならない児童生徒、元気な子供と言ってもいいのですが、そういう教育的な予防をする。休もうかなと思ったとき、「でも、休むとまた先生が『〇〇君どうして休んだの。』とうるさいよな」とか、「『〇〇君、昨日来なかっただろう。』としつこいから、面倒くさいから学校へ行っちゃえ」という感じのお子さんになってくれれば、それでいいと私は思っています。

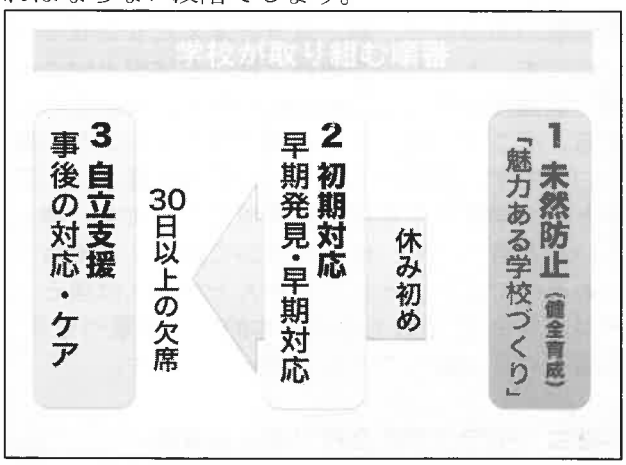
ただ、このような働きかけを、どれくらいの(学校の)先生が熱心に行っているのかなというところが微妙です。一昔前、今から 20～30 年前は逆の意味で問題だったのだと思いますが、学級担任はもっとプライドを持っていました。「私のクラスから不登校なんて出してたまるものか。」その頃は登校拒否と言っていましたが、子供がもし学校に来ないとなれば「何で私のクラスで休むのだ。私

の教え方が悪いというのか。私の学級経営が悪いというのか。」といった感じで、よくも悪くも自分の責任と受け止めていました。

もちろん、それが裏目に出ると「とにかく来なさい。サボッてるんじゃない。」というように、逆効果になるようなことをやられた先生もいます。その一方で「おかしいな、なぜだろう？ちゃんと○○君にも声を掛けているのに。他の子供達に比べて特に声掛けが少ないのかな？そんなこともないし、ちゃんとやっているのにおかしい…。」と考えて、保護者の方とも話をされて、「どうしたらいいのでしょうね。」というように一生懸命やられてきたことも昔は多かったと思います。

ところが、最近は無理に学校へ来させることはよくないといった話が一般的になり、それと同時に先生方があまりプライドを持たなくなったような気がします。先生の授業がおもしろくないから、学校へ来てないとしか思えない場合でも、自分の責任と感じない方が少なくないようです。

私のセンターでは、最初に①未然防止があり、休み始めた時から行うのは②初期対応であり、それが 30 日を越えたら③自立支援・事後の対応という順番でやって頂くようお話ししています。従来は、まず③をやっていて、それだけではだめだということで②をやられてきたと思いますが、そもそも学校の論理から言えば、まず①でしょう。それから②。それから③になってきます。だんだん学校にも来なくなってくるし、なかなか難しい。個人のケアの問題もかかってくるので、外部の専門家の力も借りながら、協力してやっていかなければならない段階でしょう。




むしろ、(学校の)先生方のプライドでやって頂かなければいけないのは①。外部の人達の助言なども含めてやっていくのは②。③は、外部の先生方に頑張って頂く。そして、その子達が学校に戻ってきたときの受け皿を何とか作るのは(学校の)先生です。けれども、そうした子供達をその気にさせて頂くのは外部の専門家の方です。このような住み分け方が正しいのかなと思っています。

さて、①の「魅力ある学校づくり」についてですが、この言葉は私どもの研究所、センターの事業名でも使っています。そもそも子供たちが学校に来るのが楽しいとか、学校へ来るといろいろとためになるなとか、思ってもらいたいということでやっています。ここにいる先生方の中で今、勤務しているのは小学校ですという方、手をお挙げ下さい。中学校…。高校…。

小学校の先生方も一杯いらっしゃいますが、多くの小学校の先生たちの感覚で言うと、不登校児童ってみなさんの学校にはほとんどいませんよね。例えば、「私の学校は一人、二人です。」とか、ちょっと小規模な学校だと「今、２年生に一人休みがちな子がいますが、うち（のクラス）にはいません。」とかです。よく欠席する子がいて不登校ではないかなと思うのだけれど、「この子は病気であって、不登校ではありません。」とあっさり言われたりもします。でも病気なら病気で放っておくわけにはいかないだろうと思うのですが、割と「ほとんどいません。」と言って澄ましている方が多かったりします。

それから、「学級担任を中心とした取組で十分なんじゃないの。」といったように、担任が少し努力すればどうにか登校もさせられるという感覚は割とお持ちかもしれません。学校へ行く途中にその子の家に行き、「先生来たよ。先生迎えに来たよ。はい、学校行くよ。」という具合に、何とか連れて来られるみたいな感覚があったりもします。

ですから、たまたま自分のクラスに不登校の子供がいない小学校の先生方にしてみると、「うちには不登校はいないし、特段不登校なんて大騒ぎしなくてもいいんじゃないの。進学した先の中学校にはいるけれど、あれは中学校の先生がだめだからだよね。」といった感覚で、あまり自分達の問題とは思われていない方って多いのかな、と思います。

未然防止のための「魅力ある学校づくり」

○多くの小学校の感覚は、
- 不登校児童は、ほとんどいない
- 個別の対応で、どうにか登校もさせられる
- 学級担任を中心とした取組で十分なはず
- 未然防止・学校づくりという必然性がわからない

○未然防止の取組である「魅力ある学校づくり」とは、
- 小学校では、中学進学後に不登校や長期欠席にならないように児童を育てる
- 中学校では、小学校で育った児童を不登校や長期欠席ににさせないように生徒を育てる
- そのために、授業づくりや集団づくりを、小中学校で進めていく

むしろ今、小学校の先生というと、「不登校はいないのだけれど、うちは発達障がいが大変。あの子絶対ね、私のクラスの○○さんや○○さんは絶対に発達障がいだから。」といった主張をされる方が結構みえます。「あの子が言うことを聞かないのは、私が悪いんじゃなくて、あの子が発達障がいだから…。」「検査しても出てこなかったけれど、何かの間違い。あの子は絶対に発達障がいだと、私は確信してます。」と話される方も多かったりします。

このような中で「魅力ある学校づくり」とか、「未然防止」をしなければいけないと言っても、いまいち乗ってこない先生方が多かったりします。ただ、私どもは小学校時代がすごく大事だと思っていて、「中学校に進学した後に不登校や長期欠席にならない」ように育てておいて下さい、と思うのです。確かに中学校の先生にも問題があるのかもしれません。やれ部活だとか朝練だとか言い、子供たちを駆り立てたりしているかもしれません。しかし、「そんなことくらいで負けるようではダメじゃないか」くらいのつもりで、「もしこの子が不登校になったら、中学校の先生たちに文句を言ってやるんだ。」くらいに自信をもって育ててほしい、送り出してほしい、と私は思っています。

逆に、中学校では、「小学校で育った児童が不登校や長期欠席にならない」ように生徒を育ててほしいのです。せっかく小学校時代に大事に育てられてきたのに、それを「中学校で不登校にさせたら後で何を言われるか分からない」くらいのつもりでやって頂くのが大事かなと思います。そのために、授業づくりや集団づくりを、小・中学校を通して進めていくというつもりでないといけないと思っています。

高校の話が抜けていますが、高校の不登校の取組が難しいのは、先生方の中には（生徒は）好きで来ているからという方が結構いらっしゃるのです。「小・中学校は義務教育だけど、高校は好きで来ているのだろう。好きで休む子の面倒を何でみなければならないのだ」という話がでてきたりします。

本当に好きで休んでいるのだったら、いいですよね。「いや、僕は高校に来たけれど、実は親が高校に行けと言ったから来ただけだ。本当に僕がしたいことはダンスの勉強だ」なんて生徒もいることでしょう。一昔前だったら、僕は大工の見習いになって家を建てたかったという子供がいましたし、今でも職種こそ違いますけどそんな子はいます。そういう意味で積極的に学校に来ないとか、違う進路に行きたいといった子供もいます。ですが、そうではなく授業を受けていても馴染めないといった理由で学習機会から離れてしまうことがあれば、それでいいのかは、お考え頂きたい。場合によっては、先生方の授業の仕方次第で、来たり来なかったりするという子供も出てくるのかなと思います。一昔前と比べると子供たちがちょっと弱くなった面もないわけではないと思います。

先程、私は岐阜市の出身だと紹介されましたが、私が通っていた頃の岐阜高校はある意味、とんでもない学校で…。合格発表があります。その後すぐに体育館に集められて、春休み中の宿題と４月から使う教科書が渡されます。４月になるまでに問題集などもやっておくようにと言われるのですが、そんなものやるわけありません。そもそも中学校時代に宿題を家でやった記憶がありません。学校で宿題がでても、休み時間にぱっとやれば解けてしまうくらいの子ばかりが岐阜高校に集まっていました。皆、なめているわけです。「春休みに問題集やってこいとか訳わからん。４月になったら先生が教えてくれるはず」などと思っていると大間違い。４月の最初の授業の時にいきなりテストをやるわけです。中には真面目にやってきている子もいて、何十点も取っている子もいれば、０点に近い子もいるわけです。最初に谷底に突き落としておいて、後は這い上がれなければ知らないという高校だったのですが、当時はそれが全く問題にならなかったのがすごい。

ただ、30～40年前はそれで通ったかもしれませんが、今はそんなわけにはいきません。むしろ進学校の不登校って結構多かったりして、進学校はなかなかつらいのです、不登校や中退に関して。逆に職業科や総合学科は、実習などいろいろな授業形態があるので、割と気分を変えたりさせやすいのです。ところが普通科で特に進学校というのは、勉強だけやっていればいいみたいなところがある。そこで一回ボタンを掛け違うとなかなか難しいのです。全国のそれぞれの県の一番手、二番手という学校の不登校は結構増えています。増えていると言っても、何十人とかではなく一桁台ではあるのですが、それでも６人とか７人は居ることがあります。それも私は基本的には授業づくり、集団づくりで解決できると思っています。

**○参考：小学校で不登校が増える背景**

さて、ここから、参考の話です。小学校の不登校は今、増えていると言われています。何故増えているのか。高校の不登校が増えたのは、むしろ中退が減っているし、授業料がただになっている関係で、昔だったら授業料がもったいなから辞めなさいと言われていたのが辞めなかったりするということも関わっています。しかし、小学校の不

登校の増加については、本当に小学校の先生たちの意識を変えて頂かないと困るのです。

ある県の場合…

| H24 | | 小1 | 小2 | 小3 | 小4 | 小5 | 小6 | 中1 | 中2 | 中3 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 不登校数 | | 0 | 4 | 7 | 21 | 28 | 45 | 122 | 200 | 181 | 608 |

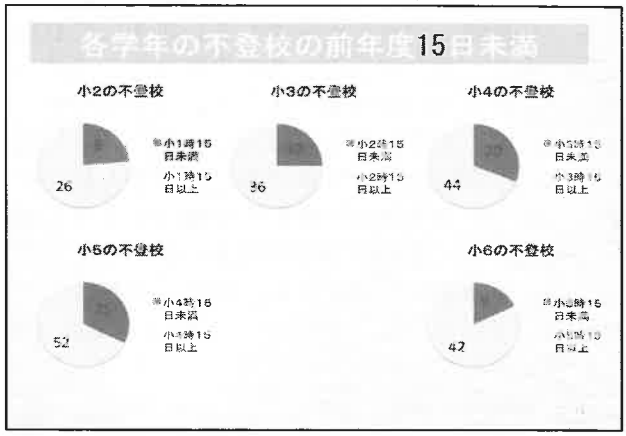
| H25 | 小1 | 小2 | 小3 | 小4 | 小5 | 小6 | 中1 | 中2 | 中3 | | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 不登校数 | 1 | 5 | 10 | 14 | 41 | 49 | 135 | 179 | 207 | | 616 |
| 継続数 | | 0 | 3 | 3 | 13 | 20 | 39 | 107 | 158 | | 343 |
| 復帰数 | | 0 | 1 | 4 | 8 | 8 | 6 | 15 | 42 | | 84 |
| 復帰率% | | - | 25.0 | 57.1 | 38.1 | 28.6 | 13.3 | 12.3 | 21.0 | | 13.8 |
| 新規数 | | 5 | 7 | 11 | 28 | 23 | 76 | 72 | 49 | | 272 |
| 新規率% | | 100.0 | 70.0 | 78.6 | 68.3 | 53.5 | 60.1 | 40.2 | 23.7 | | 44.2 |

ある県から相談を受けたとき、数字を出してもらわないと分析できないと言って、頂いたデータです。平成 25 年（H25）の小１から中３の不登校数がこれだけいるという表です。わりと小さな県ですけれど、その下の欄に継続数というのが出ています。例えば小１の継続数と言っても、幼稚園の時の話は関係ないので、その欄は空白です。小２の５人の中で継続しているのは０です。だから、彼らが１年の時に不登校だった子は居なかった、ということになります。

さて、その上の平成 24 年度（H24）の数字では、小２に不登校が４人いました。彼らは平成 25 年度に小３になりますが、H25 の欄を見ると継続したのが３人です。という事は４人のうち１人は復帰しました。その下の復帰数の欄です。また、10 人の内で３人が継続ですから、７人は新規ということです。さらに下の新規数の欄です。

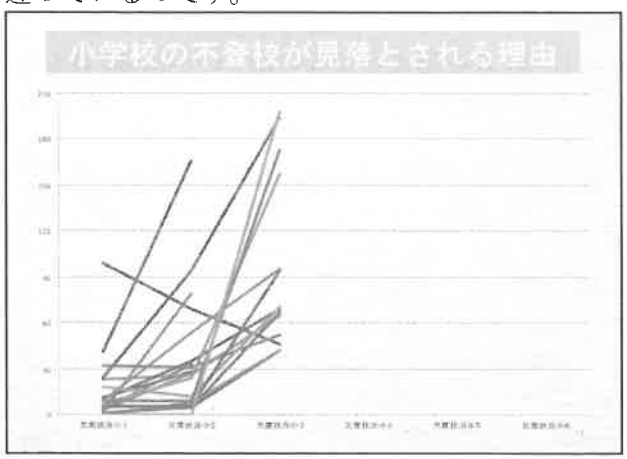
ということで、たいして難しいことをやっているわけではなく、２年分の不登校の数字からこんなふうに計算ができます。でも、ここを見て頂いたときに、いろいろとわかってくる。よく中１ギャップなんて言われるじゃないですか。中１で不登校が増えるのが問題なんだ、という言い方をされます。確かに、中１の新規率は６割です。中２、中３はむしろ４割、２割と減ります。ところが、この中１の６割と匹敵するのが、小学校の時の新規率。もともとの数が少ないからついつい見過ごしがちなのですけれど、小４や小５の新規率は７～８割。どんどん新規に不登校になっていきます。それが積み重なって６年生になり、ただでさえ多いところに新規率も多くなるので、いきなり中１で増える感じになる。でも、中１だけで問題が起きているわけではないことに気づいて下さい。

小学校の不登校が見過ごされる理由ですが、このグラフでは小学校６年間の間の欠席日数がどういうふうに変わっていくかという所を見ています。




一人分が一つの折れ線になります。小１の時にある程度休んでいた子が、小２になって休む。割と想定内。ところが、そうした子よりも小１の時には休んでいなかったのに、いきなり 30 日を大きく越える子供がいる。あるいは、１年、２年の欠席日数を見ていると大きく休むことはないという印象なのに、小学校３年生になっていきなり 30 日を超えてしまう。もちろん、１年生の時に欠席が多かったから、一生懸命働きかけて、働きかけて、やっと減ったといういい例もあります。でも、この跳ね上がり方が、私は非常に大事なポイントだと思っているのです。どうしてこんなに急激に増えるのかというあたりです。

そうした動きになることを、きっと小学校の先生は想像もしてないと思うのですが、それがたぶん一番の問題です。それが、小学校の不登校が急に増えるようになった一番大きい理由だろう、と私は思っています。つまり、中学校で急激に増えたりしないのは、不登校をほぼ想定した形で先生方が動けているからです。ところが小学校に関しては、想定していない事態が今、起きているのです。去年までの情報から言えば、これくらいで何とかなるだろうなと思っている数字が、まったく違っているのです。




たとえば、このグラフですが、小学校６年生で

言うと、５年生時に欠席が 15 日未満だった子が９名（２割弱）いることを示しています。これはどういうことかと言うと、５年の時に少し多めに休んだけれど 15 日未満ですよという子供です。小学校２年でも２割強ですけれど、実はこうした数字は、小学校４年、５年で多く、３割を超えます。つまり、前学年の欠席から予想できるよりも多く休んだ子供がその学年には多いということです。去年の様子から聞いている限り、不登校にはならない子だろうなと思っていたのに、実は 30 日を越えましたって子供がこれくらい多い、ということなのです。

さらに言うと、60 日以上の不登校について、前の学年で 15 日未満しか休んでいなかった割合を見ると、やはり小学校４年や５年で多い。本当に急に60日を超える子供がいる。こうした状況に、学校が全然対応できていないんですね。だから、私のクラスで不登校なんて出るわけがない、去年休みがちな子も５日だとか６日だとかだから大丈夫。私の学級経営は大丈夫なんて思っている学級で、急に不登校が出るのです。それも 60 日以上がポンと出てきたりする。

小６の先生たちはなんとなく覚悟していて、意識は割と高いと思います。ところが、小４や小５の先生ってそんな事を思った事もない。あるいは思う事もできないような人たちを、校長が担任に充てているということもあるのかもしれません。まあ、子供達は元気だから大丈夫だろう、あの先生で、といった話があるのかもしれないなという気がします。

さっきのデータを別な格好で集計すると分かるのですけれど、60 日以上の子供が翌学年も 60 日以上になる割合は、80%から 90%です。つまり、一度60日を超えると８～９割はまた60日を超えるのです。そのまま中学校に行ったりすると、学校復帰は非常に困難になります。このように考えていくと、いかに早い段階で不登校にさせないか、いかに60日を超えさせないか、いかに30日を超えさせないかといった考え方をしていかないと難しいのです。

中学校の先生は、薄々その辺りのことに気づいているのですが、小学校の先生の中には他人事と思ってらっしゃる方が意外と多いのです。だから、学校に戻ったら伝えて頂きたいのです。子供たちが休まないということは、実はすごく大事なのだよ。子供達が毎日元気に学校に来る、時々は子供同士のトラブルもあるかもしれないけれど、それでも翌日には仲直りしてケロっとして来てくれる。ケロっとはしなくとも、お互い様だからねって励まし合いながら来られる…　そんな学級を作って下さい、と。このような話を真剣に言っておかなければいけない。「私はちゃんと勉強を教えているから大丈夫です。落ちこぼれは作りません。」と言わせているようでは、まずいと思います。

**○「初期対応」の取組**

さて、話を本筋に戻して、それではどのような対策をとっていくか、という話です。初期対応の話と未然防止の話です。中学校中心の説明なのですが、小学校も同じことです。

ここでも高校は取り上げられていません。実は、高校の調査は本当に難しいのです。高校は種類によって全く違うのです。種類によってという言い方も変なのですけれど、極端な話、小学校は全国の小学校をほぼ同じイメージで語れます。中学校もそうです。しかし、高校は岐阜県の高校と三重県の高校は違いますどころではありません。岐阜県の○○高校の普通科と△△高校の職業科とは、全く違うのです。集まって来ている子供も違います。しかも普通科といったらみんな一緒かといったらこれも違います。高校という名前で一括りにしていますが、高校は本当に一つ一つが別の学校です。

小学校や中学校の場合、学力の話で言うと５段階評定で言えば、１の子から５の子までいるわけです。中学校も１の子から５の子までいるわけです。もちろん、全国的に見ると、ある地域には学力テストなどで比較的高い子が集まっている地域とそうではない地域みたいなものはありますけれど、５の子供ばっかり、４の子供ばっかりなんて事は有り得ないわけです。小学校や中学校は、全国のどの学校も多かれ少なかれ似ているのです。似た課題をお持ちなのです。

ところが、高校は、中学校段階の評価で１の子なんか来るわけがないという高校があります。みんな４や５しか取ってない子供ばかりしかいませんとか、逆にうちは５なんかとったことがない、先生から褒められたことなど一回もない、なんて高校だってあるわけです。

話は脱線しますけれど、不登校やいじめを結構減らしている高校で、愛知県で底辺校と言われている学校の一つなのですけれど、中学校の先生から言えばどこへ行かせたらいいのだろうといった、本当に最後の砦みたいな高校です。そこの校長先生が「私の仕事は賞状を渡す事です。」と言われていました。その内容はと言うと、「一生懸命掃除をしました。」で賞状をくれます。「部活の朝練に休まずに来ました。」でも賞状をくれます。つまり、今まで誉めてもらった事がない、賞状なんかもらった事がないといった子供達に「○○高校○○科

１年１組○○　○○。あなたは、朝練に欠かさず出たのでそれを賞します。」と言って賞状を渡すのです。これはなかなかすごいことです。生まれて初めてそんなものをもらったというようなことで学校に繋ぎ止めるのです。学校に来てよかったと思う子が出てくるわけです。

ところが、そんな事を進学校でしていたら、きりがありません。進学校だと、来たくない子はもう来るな、自分の意志で頑張れない子は来るな、と平気で言ってしまうような所があるのです。そういう意味で言うと、高校の調査というのは抽出ではなく、全県まとめて行わないと無理です。全県まとめて行わないと全体の傾向は見られません。中学校だったら、岐阜市から３校、羽島市から１校といったふうにやっても、何となく岐阜県の全体像を描けるのですが、高校に関しては、実は先の底辺校の調査をしたことがあるのですが、その底辺校の話を一般化するなんてことはとても無理です。そんなわけで、高校の話は確かなことはお伝えできないのでご容赦下さい。

**「不登校になりそうな児童生徒」とは**

○いきなり「不登校になる」ことはできない
　不登校というのは、
・30日以上の長期欠席者のうち、
・「不登校」を理由とする者

○30日を超えるまでは、「不登校」ではない
・休みがちな児童生徒、30日を超えそうな児童生徒がいても、30日を超えるまでは「不登校」ではない

○30日以上の欠席を阻止したいなら、ターゲットは誰の目にも明白
・休み始めた児童生徒、とりわけ「経験あり」群

さて、「不登校になりそうな児童生徒」ということです。冒頭で説明したこととも関わってきますが、いきなり不登校にはなれません。不登校になろうと思ったら、まず 30 日以上長期欠席をしていないといけない。さらに、その理由が「不登校」でないといけない。だから、病気なんかで休んだのでは不登校と呼んでもらえないわけです。そうすると、30 日を超えるまでは不登校ではないということは、不登校になるには、一ヶ月では済まないのです。日本全国の子供達が「不登校ではない」月は何月かといいますと、４月です。４月に早々と不登校になったなどということは有り得ない。

なるに違いないという見込みはあります。しかし、４月の間の出席すべき日数は 20 日くらいしかない。特に、第１週は休みなので、絶対に 30 日は超えない。そう考えるなら、不登校になろうと思ったら、一ヵ月半は必ずかかります。だから、30 日以上の欠席を阻止するのであれば、ターゲットは誰になるのか。当然、休み始めた子供です。とにかく２日とか３日、休み始めたらちょっと危ないかもしれないと思って「初期対応」をして頂ければいいのです。

これは、いじめと比べれば本当に簡単な話です。いじめの場合は、目に見えにくいというのがあります。不登校の場合は、そこに存在しないけれど、存在していないということ（休んでいるということ）で実は、この子が休んでいるということは丸分かりです。そういう意味で言うと、いじめより対応の仕方としては分かりやすい。

**「経験あり」群と「中」不登校調査**

※以下のような区分により、調査・分析を行った

| 区　分 | 小学校４～６年の各学年の状況 |
|---|---|
| 不登校相当 | 欠席日数＋保健室等登校日数＋（遅刻早退日数÷2）＝30日以上 |
| 準不登校 | 欠席日数＋保健室等登校日数＋（遅刻早退日数÷2）＝15日以上30日未満 |

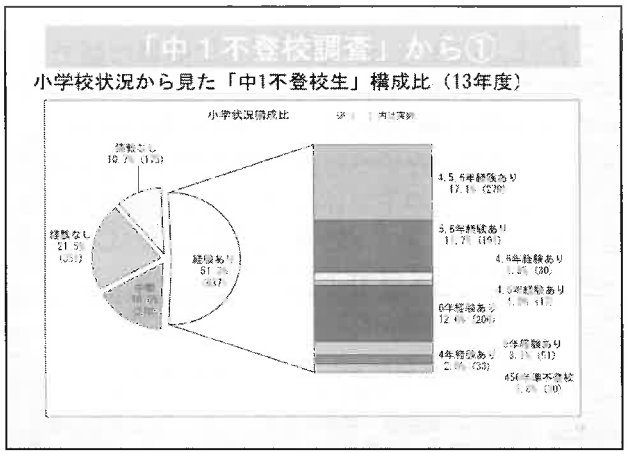
| 区　分 | 小学校４～６年の３年間を通じての状況 |
|---|---|
| 経験あり | ・３年間の間に一度でも「不登校相当」に該当<br>・３年間とも「準不登校」に該当 |
| 経験なし | ・３年間とも「不登校相当」、「準不登校」のいずれにも該当しなかった |
| 情報なし | ・小学校からの情報提供（小６時の）がなかった |
| 中　間 | ・上記以外の者 |

ここで、「不登校相当」とか「経験あり群」という妙な表現が出てきます。要するに、前年度 30 日以上休んだ子供のことを「経験あり」と言っています。この時、欠席日数以外に保健室登校日数なども後の不登校には影響があったりします。欠席０日ですと言われても、ずっと保健室に行っていたような子供たちもいます。なので、保健室登校の日数も欠席扱いとして計算する。遅刻、早退も取りあえず半日の休みという恰好で計算します。中には本当にいるのです。欠席は 17 日だけれど、遅刻、早退は 140 日とか。それは、私的に言うと不登校予備軍としか言い様がない。また、30 日未満でも日数が 15 日以上だと、「準不登校」みたいな言い方をして、表のように分類します。

そんな中で、小４から小６の３年間に一度でも不登校になったりすると、「経験あり」、３年間とも「準不登校」、つまり 15 日とか 20 日くらい毎年休んでいる子供も「経験あり」と分類する。簡単に言うとそういうことだと思って下さい。こんな風にして計算してみると、意外にいろいろなことが分かります。従来、言われてきた事と違う実態が見えてきます。

まず、中学校１年で不登校になった内の半分はここで言う「経験あり」群になります。「問題行動等調査」の数字だけを見ると、全国的な傾向として、小学校６年から中学校１年になる時に不登校は２.５倍から３倍になります。それを根拠に、「中

１ギャップ」なんて言われたりしています。でも、実は潜在的な部分が結構抜け落ちていることに気づいていないわけです。




実際に調査した結果をご覧下さい。例えば、「問題行動等調査」の小６の不登校数の中には、６年の時の不登校の子供、５～６年時と不登校だったような子供は含まれています。ところが、４～５年時の不登校の子供は、そこには含まれてこない。小６では不登校でなかったからです。そこで、小学校４年時までさかのぼって、５年時や４年時の不登校、あるいは３年間とも「準不登校」の子供まで探しだして足していくと、十数パーセントになります。大体、中１の不登校の半分が「経験あり」群になる。小６から中１で２.５倍から３倍になると言われてきましたが、６年の時点だけ 30 日を超えていなかった子供は計算に入っていない。その結果、急増というイメージが強調されてしまうのです。実際には、せいぜい２倍です。

実際、この調査の時は、本当にすごい数字がでてきました。小６の時の欠席日数が 28 日とか 29 日という子供がかなりいて、捏造したのか、意地でも 30 日にさせないと学校で何かをしていたとかしか思えない数字でした。そんな具合に隠れている数字まできちんと見ていくとどうなるのか、ということです。

今、「経験あり」の子供の数字を見てきましたが、反対に「経験なし」群。この「経験なし」群の基準は、随分甘い基準です。欠席が 15 日未満。先ほど申し上げたとおり、欠席が二桁になるというのは、普通の子供にとっては至難の業です。15 日休めるといったら、ディズニーランドには行けるし、他にもいっぱい遊びに行って、しかもインフルエンザにもかかって、みたいな場合でさえ、そう簡単にはクリアしない基準です。

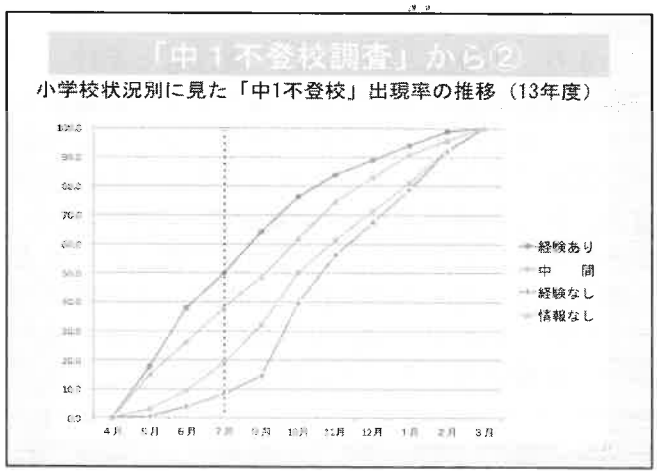
それくらい甘い格好で 15 日を超えなかった子供。小学校の４、５、６年の３年間とも欠席日数が 15 日を超えなかった子供達を「経験なし」と言います。そういう意味で普通にピンピンしていた子供は、この図では２割程。これはどんなに増えても３割くらい。つまり、中１で不登校になる子供の７割から８割は、多かれ少なかれ小学校時代に休んでいるのですね。中学校になって、今まで全然風邪なんかひいたこともないし、まず学校を休むような子ではない子が休み始めるというのは、中１の不登校の中では２～３割しかいません。

だから、中１ギャップという言葉をよく耳にしますけれど、私はその言葉はわりと嫌いで、何故かと言うと、事実を間違ってイメージさせてしまうからです。ギャップがあると言うと、いきなりそこで不登校になるみたいじゃないですか。しかし、実際にはいきなり不登校になるわけではありません。小４までさかのぼると十分に予兆がある子供達が７～８割いるのです。実は、中学校の不登校は小学校とつながっているのです。小学校６年時に、たまたま 30 日を超えていなかったというだけの話、あるいは保健室登校で欠席扱いになっていなかっただけの話で、急増に見えている。だから、ギャップ、つまり不連続性よりも、むしろ連続性ととらえてほしい。

最初の方で言いましたね、「中学校になって不登校にならないように育てて下さい」と。実は、そこなのです。小学校で 30 日を超えさせないということは、ちょっと頑張ればできるのですね。少なくともそれはして欲しい。ただし、その時点だけ 30 日を超えないというだけでなく、中学校に行ってからも 30 日休まないで済むような、何か本人なりの意欲なり、目標なり、あるいは友達との関係なりみたいなものを作って頂かないとダメだろうと。

こんなことを言う専門家がいます。「いつ誰が不登校になってもおかしくない。なりそうな児童を事前に見つけることなんて不可能です。」と。だから、事後のケアこそが唯一できること、みたいに言われるのですが、私は不登校になりそうな子供は絶対に見つけられます。小学校１年生は無理。小学校２年生以上の子だったら不登校になりそうな子供を半分位の確率で当てられます。理由は簡単です。もう分かりますね。前年度の出席簿をもらえばいいのです。前年度の出席簿をもらっておけば、中学校１年生の子供の中で「この子、不登校になるよ。」ということを予言できるし、その前の６年生、５年生の頃の欠席日数さえもらっておけば、「あっ、この子危ないからね。」と言えてしまうのです。全くそういう情報なしで、どこかの学年で初めて不登校になる子供を予見することは難しいのですが、中学校くらい、あるいは高校なんかの場合には、なりそうな子は十分に予見ができます。不登校になる半分の子供は、前年度まで

に必ず休んでいますから。しかも、正確にいうと半分というよりもちょっと多いのです。




しかも、これを小学校の欠席状況と併せて見ていくと、もっといろいろ分かります。このグラフですが、小学校４年～６年までで「経験あり」群と言われた子達は、７月までに50%の子供が休みます。さっき申し上げたように４月は０%です。４月には、「経験あり」群といえども０%ですが、５月になるとこの内の２割弱が30日を超えます。７月までには半分が30日を超えてしまうのです。「中間」群、「経験なし」群は、そんなに急には増えません。そして、「情報なし」というのは一番怪しいのですが、そもそも小学校時代の欠席日数が無記入のまま中学校に情報が来てしまう。何故、空白で小学校が出してきたかは、大体想像できますけど。要するに、「経験あり」群はいわゆる３学期制でいうところの１学期の終わりには半分が30日を超えてしまうのです。それに対して、新しく不登校になる「経験なし」群の子供達の場合、７月末では１割くらいしかいないのです。

そんなわけで、１学期はとにかく休み始めた子供に注意して下さい。でも休み始めた子供全員ではないですよ。去年、一昨年休んでいた子が１日、２日休んだら、１日休んだ時点でもう動いても間違いはないです。去年まで休んでいるという実績がある子についてです。それに対して、去年まで全くそんなことがない子供だったら、まあ１日、２日休んだって、あんまり大騒ぎしなくていいです。とにかく１学期、注力するのはこの「経験あり」群だけです。だから、「経験あり」群は２日休んだ時点で開始しても早すぎることはないのです。さすがに１日ではというのはあんまりですので、こんな言い方をしていますけれど。

だから、全ての生徒に対して同じようにするのではなくて、既に予兆のある子達。「初期対応」という言い方は、そういう事です。初期の段階でできるのは、当てがあるからです。それくらいの見通しがあるからだと思って下さい。こうしたことは、全ての学年に言えます。小学校６年生の不登校の「初期対応」には、５年生の情報が必要です。ただ、同じ小学校の中の学年であればすぐに情報をもらえたり、極端なことを言えば「去年の出席簿、教頭先生、見せて。」とか言えば済んだりするので、それはそれで何とかなるのですが。でもそういうことに関心のない先生がもしいるのだとしたら、それはキチッとやった方がいいです。

高校に関しても、入試の前にそれを聞くわけにはいかないと思いますが、地域によっては合格発表後に情報交換をやる所があります。岐阜県だとなかなかそういう所って少ないと思うのですが、例えば大分県だと、日田地区というちょっと山奥のなかなかよい所ですけれど、盆地みたいな所に高校が３校あります。そうすると、特に成績優秀な子は大分市などに出るのですが、それ以外の子供は大体その地域に残ることが多いのです。なので、合否判定が出たらすぐ、中学校の先生方と情報を交換します。不登校になりそうな子供とか非行に走りそうな子供の情報を、高校が事前に把握した上で新学期を迎えられるわけです。日田地区の３つの高校の不登校の割合がとても低いのには、そんな背景があります。しかも、中学校時代に休んでいた子供もそうでない子供も、４月、５月の時期から学校への適応感がすごく高い。下手をすると、勉強のできる子達ばかりが集まる大分市内の進学高校よりも、「学校が楽しい」とか、「授業がよく分かる」なんていうアンケートの数値が上回るくらいです。もちろん、授業が分かるなんていうのは、絶対的な学力ではなくて、自分が勉強についていけているかどうかという面があるからですが、それにしても県内でアンケートの数値が高い進学校を上回る値が出るのです。

「初期対応」の進め方

・基礎的情報の収集と分類
　1）新中学１年生の全生徒について、小学校４～６年生時の欠席状況の情報を入手（３月末）
　2）「経験あり」群、「経験なし」群等に分類（４月初め）

・対人関係への配慮
　1）学級編成を工夫する（４月初め）
　2）学級開きでゲーム等も交えた自己紹介（４月初め）

ですから、それくらい事前の情報を収集して生徒に備えるのは、大事な話なのですね。この図では中１の例なので６年生という表記なっていますけれど、他の学年も基本的には同じように、前年度、あるいは前々年度の情報を収集し、欠席し始

めた時に備えましょうということです。

もう一つは、対人関係への配慮もありますよね。学級編制を工夫するなんて、本当は今日お集まりの皆さんにお話をするよりも、むしろ校長会なんかでしなければいけない話です。特に小学校と中学校の接続時です。普通、中学校の下には小学校が２ないし３校、あるいは少し田舎へ行くと４ないし５校。そうすると、８割の子供はメインの小学校から来て、次に小さい小学校から１割、その次の所から５％、後は３％と２％ずつ子供が来るなんてことが起こる。

ところが、日本の学校の先生は真面目なので、中学校が１学年３クラスあったら、全員を３等分するのですね。小さい小学校からは２人しか来なくても３等分しようとする。要するに嫌でも引き離されるわけです。３人しか来ない中で引き離してどうするの、と私は思います。これは 10 人、20 人でも似たような話です。例えば 20 人来るのだけれど、学校の中で５クラスあるとしたら４人ずつになります。男の子２人、女の子２人になってしまうわけです。こんな時に、１年生の時は１組から３組までにその子達を入れてしまい、４組、５組には入れないといったような配慮をします。そして、２年生になったら、部活等で顔見知りになっていますから、普通に等分する。例えば、学級編成の際にそういうようなことを工夫することができます。

あと、担任にどういう人を持ってくるか、みたいな話もそうです。特に、休みがちな子供の場合には、どのクラスに入れるのかが重要になってきます。つまり、学校経営上の配慮で不登校にさせずに済ませることが結構できるわけです。中学校の場合には、中１、中２、中３と先生方が持ち上がるのが一般的ですね。持ち上がることについては、私はメリットがすごくあると思っていますからそれはいいのですが、中３になった先生達が自動的に中１に全員降りてくるというシステム。それを単純に行っていると大変なことが起きたりします。

例えば、中３が荒れていた中学校なんかだと、先生方もすごく苦労をしてきて、とにかく卒業生を送り出した。もう今度はこんな失敗はしないようにしようと思って、まだ幼さの残る中１を相手に、「お前ら中学校をなめてるだろ。」と脅すところから始めてしまう。実際、翌日から不登校になった子供がいるのです。笑い話ではありません。卒業した中３に恨みがあったからといって、新しい中１にぶつけるなよ、ということです。また、これも本当にあった話ですが、中３の担任の中から全員を中１に降ろすのではなく、中１を持たせるのは男性であれ女性であれ、どちらかというと柔らかそうな人を担任にした。すると、不登校が激減したのです。

つまり、不登校というのは、実はきっかけってつまらないことだったりもするのです。宿題を忘れたから先生に叱られるんじゃないか、そんなことが理由で不登校になったりしますからね。私の身近にあった話で言うと「給食を食べなかったら、昼休みは遊ばせません。」と言われて食べ終わるまで泣きながら食べさせられた子供の、その隣に座っていた子供が不登校になりました。友達の姿を見て不登校になった。こんなことが起きてしまうのです。もちろん、それをさせていた担任自体は、そんなに悪くはないじゃないですか。宿題を忘れたら叱るなんて当たり前。給食を最後まで食べさせたいというのも、別に意地悪をしているわけではない。でも、そういうことが負担になる子供もいたりするので、そういうことが多少なりとも分かる人を担任や学年に入れておかないと難しい。

それから、いきなり「授業始めるよ。」と言う。さっき話した私の高校の体験なんて最悪なわけです。学級開きどころじゃないですからね。いきなり「はい、教科書片付けて！」「はい、鉛筆だけ！」「はい、プリント！」と言われ、何が始まるのかと思ったら試験が始まったわけですから。それくらい出会い頭にパカンとやるのですけれども。そうではなくて、もう少しゲームとかやって和ませてから始めてほしいという話です。

**「初期対応」の進め方（続き）**

・チームによる対応
1）「経験あり」群の場合、早期に（たとえば、累積欠席日数が２日になった時点で）対応チーム（生徒指導主事、養護教諭、学級担任、スクールカウンセラー等）発足
2）本人や保護者との対応、その反応等を記した個人記録票を作成
3）スクールカウンセラー等による見立て（情緒的混乱か否か）と、対応責任者の決定
4）週に１回程度のチーム会議

そして、実際に休み始めたらチームによって対応して下さいという話です。これについては、今日お集まりの皆さんには、そんなに説明は必要ないかも知れません。

### ○「未然防止」の取組

次に、「未然防止」の話に移ります。不登校にならない児童生徒というとき、「心の問題」という言葉にあまりとらわれ過ぎない方がいいです。それよりも、不登校になる子供は基本的に低学力であ

ることに注意を払って頂きたい。人間関係も大事、心も大事なのだけれど、心の面にばかり気を配って学力面に注意を払わないと大変ですね。これも、もしかすると皆さんの中でトラウマになっているのかもしれません。一昔前、不登校になった時の議論の中で「勉強、勉強」と言ってはいけないみたいなことを言われていたので、むしろ勉強以外の事で気を引こうといった格好でやっていたり、あるいは適応指導教室や支援センターなどでも、あまり勉強のことを言わないようにしていたりする所があります。
る所があります。

**発想を切り替える**

○「不登校は心の問題」という発想を捨てる

・中１で不登校になった生徒は低学力である
・「人間関係」面だけでなく「学力」面にも十分な注意を払うことが重要
・学校生活の中で圧倒的に大きな割合を占める授業場面の改善が重要
・「集団づくり」と「授業づくり」を進めることが、「未然防止」（＝「魅力的な学校づくり」）

実は、全員ではないですけれど、子供達の中には「勉強はしたい」でも、お友達は苦手といった子供もいたりします。だから、勉強がキチッとできるということも支えになったりすることがあります。反対に言うと、学力が低く、お友達がいなかった場合は最悪です。ひっくり返して言うと、成績のよい子は友達がいなくても学校に来ます。先生が可愛がってくれますから。「誰かこれ分かる人はいませんか？」と言った時に、パッと手を挙げる。「おっ、○○君、さすがだね」と言ってもらえるので、友達がいなくても結構平気だったりします。それはそれで別の問題がありますけれど、とりあえず不登校にはなりません。

ところが、学力が低くてお友達がいないと、これは大変ですよ。そう考えると、やはり学力は馬鹿にはできないのです。やっぱり授業の中で「授業に参加している」という実感みたいなものが感じられるかどうかです。もう全く分からない、ついていけないという思いの子供にとっては学級の中に居ることはすごく苦痛です。

実は、全員ではないですけれど、子供達の中には「勉強はしたい」でも、お友達は苦手といった子供もいたりします。だから、勉強がキチッとできるということも支えになったりすることがあります。反対に言うと、学力が低く、お友達がいなかった場合は最悪です。ひっくり返して言うと、

**「未然防止」の進め方**

・対人関係の改善
　1）苦手意識の克服
　2）自己有用感・自己存在感の獲得

・学習面の改善
　1）「分かる」授業の実施
　2）習熟度別・少人数の授業の実施

成績のよい子は友達がいなくても学校に来ます。先生が可愛がってくれますから。「誰かこれ分かる人はいませんか？」と言った時に、パッと手を挙げる。「おっ、○○君、さすがだね」と言ってもらえるので、友達がいなくても結構平気だったりします。それはそれで別の問題がありますけれど、とりあえず不登校にはなりません。

ところが、学力が低くてお友達がいないと、これは大変ですよ。そう考えると、やはり学力は馬鹿にはできないのです。やっぱり授業の中で「授業に参加している」という実感みたいなものが感じられるかどうかです。もう全く分からない、ついていけないという思いの子供にとっては学級の中に居ることはすごく苦痛です。

こうしたことに関して、私たちは大きく二つのことをお願いしています。一つは、授業の場面でも行事の場面でもそうですが、学級や学校をどの児童生徒にも落ち着ける場所にして下さい、「居場所づくり」を進めて下さい、と。それからもう一つ、全ての児童生徒が活躍できる場面を実現して下さい、と。こちらの方は、「絆づくり」のための場づくりと言っています。

**「不登校にならない児童生徒」の育成**

次の2点を心がけ、「集団づくり」や「授業づくり」を進める

①学級や学校をどの児童生徒にも落ち着ける場所にしていくこと（→「居場所づくり」を進める）
②日々の授業や行事等において、すべての児童生徒が活躍できる場面を実現すること（→「絆づくり」のための場づくりを進める）

・問題のありそうな児童生徒に「個別対応」を行うことで解決を図るという発想（＝初期対応）とは異なる
・一部の元気のよい児童生徒だけが活躍する授業や行事をいくら行っても、未然防止にはならない

前者ですが、落ち着ける状態、不安がない状態。「次に何が始まるのだろう？」「先生に当てられたら、答えられないからいやだな。」とか、何か答えたら他の友達から「何を馬鹿なことを言っている

のだ、と言われそうでいやだな」とか、そういう意味での居心地の悪さみたいなものを作らないような授業展開をして下さい、ということです。あるいは、すごく苦手な子供達がいるのに「水泳大会をやります」とか、「みんなで競争だ」みたいな話に持っていきたがる。代表だけで競わせればいいのに「全員参加しないといけない。」みたいに強制する。そんなことが、学校を「居場所」と感じられなくなるきっかけになるかもしれません。

後者の「絆づくり」とは、子供達同士が「このクラスになって良かった。○○君と一緒になれて良かった」とか「みんなと一緒にやったキャンプファイヤーがすごく思い出になり、あれからみんながすごく仲よくなった」といったものです。でも、「絆」というのは先生が作るわけではない。「居場所」を作るのは先生ですが、「絆」を作るのは子供同士。子供同士がそういう「絆」を作れるような、感じられるような、例えばキャンプファイヤーとか何でもいいのだけれど、そういう場や機会を作って頂かないといけない。

未然防止の場合、この二つが大事です。そして、これは「初期対応」の考え方とは大きく違います。「初期対応」というのは問題のありそうな児童生徒への個別対応です。つまり、欠席しがちな子供、あるいは少し何かを言われるとへこんでしまう子、といった子供達への対応です。それに対して、「未然防止」の取組は「どの児童生徒にも」「すべての児童生徒が」です。

「どの児童生徒にも」というのは、必ず、漏れなく、というニュアンスです。どの児童生徒にも落ち着ける場所というのは、ある意味で言うとセーフティネットみたいなものです。だから、誰がその椅子に座っても痛くないみたいな椅子の事を指しています。それが「居場所」です。一方、「すべての児童生徒が活躍できる」場面というのは、この子供は算数が得意、この子供は国語が得意、この子供は音楽が得意というようにそれぞれに活躍できていれば構いません。音楽の場面だけでも、歌が得意、ピアノが得意といったことがあってもいいですね。活躍の場面が全員それぞれにあるというイメージで考えて頂ければいいです。

学校でよくあるのは、一部の元気のいい児童生徒だけが活躍する授業や行事です。誤解を招きかねないことを言うと、「いじめ防止」ということで生徒会サミットをやったりする。すると、生徒会長とか代表で参加した人達はすごく深まって元気になる。ところが、他の子供達にとってみると、あまり何のことやら…みたいな話になってしまうことがあります。行事でもそうですが、授業でもできる子達だけが活躍する授業を平気で行う先生がいます。それをやっていくと、45分とか50分の時間内で終わるから楽かもしれません。しかし、それでは困るということですね。

### ○補足１：「医療の発想」と「教育」

さて、補足の１からいきます。「医療の発想で教育を論じない。」お医者さんがいっぱいいる所で、よくこんな事を言うと自分でも思いますが、実は医療と教育って、子供の幸福を願うのは同じなのですが、問題を抱えた子供達の快復と健康な児童生徒では、やはり違うのだと私は思っています。

例えばリハビリの為のトレーニングとラジオ体操とは何が違うのかというような話です。はたで見ていると区別がつかないですけれど、リハビリの為にやっているというのは、マイナスの状態をゼロの状態に持って行く為にやっているわけじゃないですか。ところが、ラジオ体操や普通の体育の授業は、ゼロの状態を維持するなんて意味がないわけで、それを１にし、２にし、３にして伸ばしていかなければなりません。そういう違いみたいなものが分かっていないまま、病院などでやるような検査やトレーニングを学校の中に導入し、子供達のいじめを減らしましょう、不登校を減らしましょうといった学校を時々見かけます。私は、それを見ていると「だったら、いっそのこと、幼稚園を小児病棟のようにしたらいいじゃないか。教諭の代わりに看護師を揃えればいいじゃないか」と感じるのです。

**ワンポイントアドバイス（リーフ14）**

**教育の在り方を見直す際に忘れてならないことは、教育の営みと（たとえば）医療の営みとでは、共に児童生徒の幸福を願うものではあっても、それを実現する基本的な発想が異なるという点です。**

とりあえずは健康な状態にある児童生徒を想定するのか、特別な問題を抱えた特定の児童生徒を想定するのかでは、働きかけの方法も有効性も異なるのです。

問題が多発するからとばかりに、日々の授業や行事を充実させる代わりに検査やトレーニングに依存していないでしょうか。

普通、学校というと、子供達にグランドを駆け回らせて、「転ぶんじゃないよ」と言います。でも転びますよね。そうすると、保健室に来ます。治療した後に「今度は気を付けて言ってきなさい。」と送り出すじゃないですか。けれども、これが病院だと違う。もし、転んだら「はい。安静にしているのだよ。おとなしくしているのだよ。二度と転ばないように。」となるわけです。学校って「安静にしているのだよ。おとなしくしているのだ

よ。」という場所ではないじゃないですか。安静にして、おとなしくしていたら伸びるものも伸びないわけですから。そう考えると、実は教育というのは「次から次へと伸ばしていく」発想だし、病院というのは「より悪化させない」みたいな発想なので、似ているように見えて、両方共に子供達の幸福の為にやっているはずだけれど、やはり別物だな、と私は感じています。

今、学校の中で不登校などの取組が上手くいかない、発達障がいなどの取組でも実を結ばないといったことの一つの理由として、あまりにも早い段階で外部の専門家が先生方に知識を与えてしまうということがあると思います。例えば、「この子は発達障がいです。」といった話が出ると、「そうなんだ。それならばもう私の仕事ではないよね。」という話になってしまったりします。「治療が必要な子供には個別対応するしかない。私が悪いんじゃない。」といった話になり、外部の専門家が来れば来るほど質の悪い先生が増えていくような気がします。

**ワンポイントアドバイス（リーフ14）**

**そうした発想に立つと、問題の原因は児童生徒の側にあり、児童生徒の側を変える（治療する）ことが正しいことになって、未熟な教師にはとても魅力的に聞こえるはずです。**

**なぜなら、「悪いのは児童生徒やその家庭にある」という前提に立てば、「自分は悪くない。自分が変わる必要はない」ということになるからです。**

**教師の未熟さを補うために検査やトレーニングを導入しているという事態になってはいないか、もう一度問い直しをしてみる必要があります。まず向上させるべきは、授業の中で児童生徒を育てられる力量です。**

質の悪い先生というのも変な言い方ですが、例えば、「授業を聞いていないのは、この子が悪い。私が指導しても言うことを聞かないのは、この子の親が悪い。」とか。はたで見ていると「先生の言い方が悪くないですか？」とか「先生の普段の授業の進め方がおかしくないですか？」というようなことがあっても、そうは受け止めないのですね。

岐阜県ではあまり流行っていないかもしれませんが、「Q－Uアンケート」というのがあります。これは元々、学級経営の参考にする為のアンケートとして始まったはずのものです。アンケートの分布を見て、「私はえこひいきしてないかな？」「私は、特定の子供にはよく話したり、仕事を頼んだりするけれど、別の子供には頼んでなかったりするな。」というように、自分の反省のためにそういうアンケートを使うはずだったのです。それが、最近は変わってきて、そのアンケートの中で問題がある子、「要支援群」と言いますが、その子達を抽出するためのツールになりさがっています。

昔は、「要支援群」の子供の名前なんか問題にしていなかったのです。名前は出る必要がないですから。分布を見て、自分のクラスは、「なんか満足している子が少ないな。」とか、「隣のクラスと比べると少ないのはなぜだろう？」「私の話し方が早口で、乱暴な言葉だからなのかな？」と、先生が授業の仕方や学級経営について反省したわけです。ところが、そのうちに「この問題がある子は誰ですか？ 」と聞く先生が出てくる。自分が反省するためにではなく、自分の学級経営で期待通りにならない子を探す為のツールに変わっていきます。

問題がある子を探し、その子達を一生懸命ケアする為ならまだいいのです。しかし、実際には「この子達はこういう子達なのだから、私の責任ではない。」という言い訳のために使われてしまいます。この間、名古屋でいじめによる自殺がありましたよね。あそこは二年前にもいじめ自殺があり、別に河村市長を責めているわけではありませんが、「とにかくお金かけろ」と全部の学校でQ－Uアンケートをやっていました。それにもかかわらず、Q－Uアンケートには引っ掛かってきませんでした。実は、引っ掛かってくるわけがないのです。ハイパーQ－Uで「いじめられていますか？」と記名式で聞いても、そんなのに正直に答えるわけはないのです。そういうツールに依存し、「普段から子供達に注意を払っていなくても、検査したら分かる。」みたいな勘違いがあるとしたら、いじめの見過ごしが起きても不思議はありません。

ましてや、いじめってインフルエンザとか風邪みたいなものです。だから、人間ドックで検査して見つけるようなものではないのですね。例えば、ガンとか脳梗塞とかの予兆みたいなものは、年に１回の健康診断で予兆みたいなものを見つけて、早期発見、早期対応でいけるかなと思います。少しでも早く発見できる方が治療の可能性も広がります。でも、いじめというのは、風邪やインフルエンザみたいなものなのです。知らないうちにかかっていて、知らないうちに治ったりするのです。ただ、こじれると大変なことになり、そのまま放置しておくと肺炎になって亡くなるくらいの怖いものだということです。だから、年に１回の健康診断でインフルエンザにかかっているかどうかなんてチェックしません。そういう検査で発見して対応する類のものとは違うからです。

年に１～２回のQ－Uアンケートでいじめを発見すると言っている時点で、そもそもいじめを癌のようなものと勘違いしています。むしろ風邪とかインフルエンザなのだから、うがい、手洗い、が効きます。さらには、「早寝・早起き・朝ご飯」なのです。先ほどの「居場所づくり」や「絆づく

り」が、それに当たるわけです。日々の教育活動こそが大切なのです。ところが、外部の専門家が「治療的の発想」でアドバイスを行うことで、問題を抱えた子供に責任転嫁して教師としての責任感を低下させることになったり、問題を抱えた子供への個別対応ばかりにかまけて教師としての力量を低下させることになったりしていないか。それが、ここの話のポイントです。

**○補足２：「個別対応」と「集団指導」**

発達障がいの子達に関して言えば、個別支援に基づく対応も要るし、集団支援に基づく対応も要りますよね。一昔前までは、学習障がいって日本にはすごく少ないと言われていました。理由は簡単で、日本の学校の先生は真面目で、特に小学校では居残りさせてでも、休み時間に来させてでも九九をキチッと教えていきました。なので、学習障がいとは思われていませんでした。ある程度の成績をとってしまうからです。ところが、中学校に進学すると、どうやら英語なんか全くチンプンカンプンでついていけません。それで調べてみると、ＬＤ(学習障がい)だと分かった、みたいな。

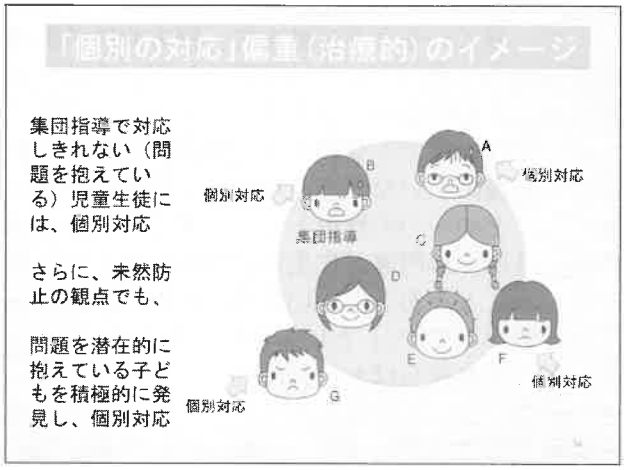
**発達障害と生徒指導（リーフ３）**

・発達障害やその傾向のある児童生徒がいる学級では、次の２つの視点での対応が求められる。

①「個別支援（個別指導）」に基づく対応
「つまずきやすい」児童生徒に対して、個に即した助言や支援を行う、取り出し授業や補習授業を行う等。

②「集団指導」に基づく対応
「つまずきやすい」児童生徒だけでなく、すべての児童生徒が互いの特性等を理解し合い、助け合って共に伸びていこうとする集団づくりを進める、分かりやすい授業づくりを進める等。

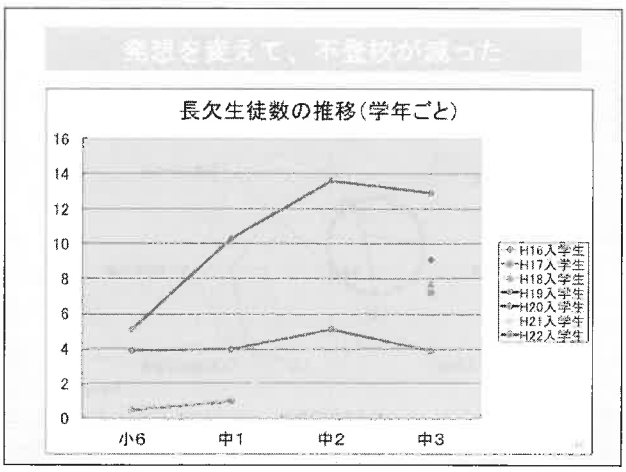
実は、一昔前の日本にも、結構、発達障がいの子供がいたはずなのです。しかし、よくも悪くもみんないっしょくたにして、指導をしてきた。時には、発達障がいの子供本人が悪いわけではないのに「お前が怠けているからだ！」と体罰をしながら学ばせたりもした。発達障がいの子供にとっては気の毒でしたが、そういうことの中で随分、適応もさせられてきたと思います。あまりよいやり方ではなかったですけれども。一方、今は、発達障がいに対する理解が進んで、体罰も禁じられ、個別支援ということで行われていることが多い。しかし、やっぱり「集団指導」も必要です。本人自身への支援というのもありますけど、本人と集団との関係みたいなものの中で、その子供も育たなければいけないし、その子供といる子供も育たなければいけません。逆に、その子供がいることで回りの集団も育つみたいなことが本当は望ましいと思います。




このイラストですが、集団指導という点で見ると、上手くいく子供と上手くいかない子供がいるわけです。 これは、表情を見ると誰が問題か分かりますね。こうやって集団指導の中で、はみ出てくるような子供達（ＦやＧ）に関しては、一応、個別に支援はするわけです。「この子は、個別に対応したり支援したりするしかない。」「この子も少しおとなしいけれど、個別に支援が必要」という具合ですね。しかし、では彼らだけが問題なのかというと、よくクラスを見てみるとＡやＢだって本当は少し余裕がないのです。何とか付いては来ているけれど…という感じですね。

こんな時、先生によっては「ＦやＧがいるから私のクラスはダメなのです。支援員を回してください。」とか「支援学級の方へ戻して下さい。」とか言われるわけです。仮に、ＦやＧの子達を戻すと、今度は「Ａもダメなんです。Ｂもきっと学習障がいです。」といったことを言い始める人さえいます。実は、こうした考え方では何の解決にもなりません。子供達にとっても、その先生にとっても、何もよいことはない。しかし、こういう事が現実には日本各地の学校で起きているのですね。

そうではなくて、普通の子たちができるルールみたいなところ、よくユニバーサルデザインと言ったりするみたいな発想だと思って下さい。こういう子達への集団指導は、20年前の子供だったら口で言うだけでも分かったかもしれませんが、最近の子供には言えば分かるだけではなくて、書いてあげなければいけないかもしれません。そんな事も含めて、教師の指示や接し方、「集団指導」の仕方を少しゆるやかなもの、わかりやすいものに変えてやるのです。




そうすると何が起きるかというと、結構、子供達が安心できるようになる。これが、先ほど触れた、「居場所づくり」ということです。ほとんどの子供が適応するじゃないですか。Gも実は怒りっぽい子だと思っていたけれど、怒りっぽいのではなく本当は困っていた子なんですよね。困っている子が「困っている」ということをどう言っていいのか分からないから、周りの子供を叩いたりして一生懸命アピールしていただけという場合もあります。まあそうは言っても100%集団指導だけでうまくいくわけではないですから、「個別対応」、「個別支援」も必要です。しかし、「集団指導」も変えていかないと、発達障がいの話も支援員さんばかりがどんどん増えて、その子も育たないし、回りの子も育たない、教師の力量はますます低下する、という状況になっていきかねない。だとしたら、まずいと思いますよね。

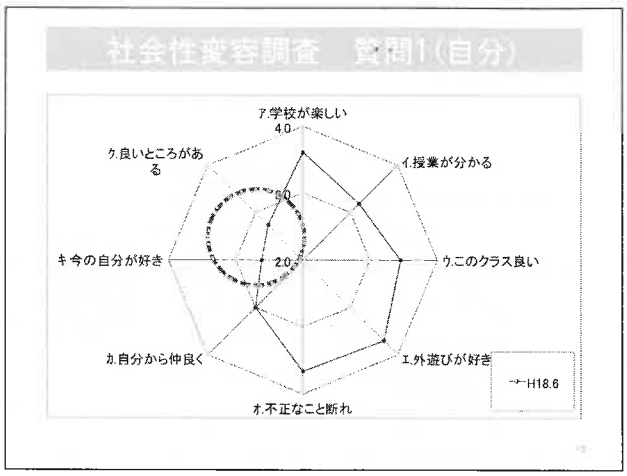
### ○補足３：小中連携と不登校

「小中連携で不登校を減らす」という話ですけれど、これ実は不登校だけではなくていじめも減るのです。例えば、このグラフですが、平成16年の入学生が中３になった時の不登校が９のあたり。これが９人だったら、大きい学校だったら別に不思議じゃないですね。でも、９人じゃないのです。これは９％なのです、実は。次の年度の子供達の時は７％ほどです。毎年、これくらいの不登校がいる学校というのは、もう無茶苦茶な学校です。小６の時点でさえ、もう５％もいるのです。クラスに一人か二人はいるという状況です。それが、年度が進むにつれて収まっていくのですが、それは何をやったからなのか、ということです。

いじめや不登校が減少する背景、そこに何があったのかというと、子供達に活躍する場面を与えていく、その集団の中で役割を与えていく、その中で認められるという体験をさせていく、といったことに取り組ませたということです。「居場所づくり」や「絆づくり」の話です。元々、この中学校区は、小学校の先生も中学校の先生も「うちの子供達ってみんな自信ないよね。」という話がよく出てくる学校でしたので、自信をつけさせようと思い、人と関わらせるということをやったのです。こういうことの中で、実はいじめも不登校も減るのですという話なのです。

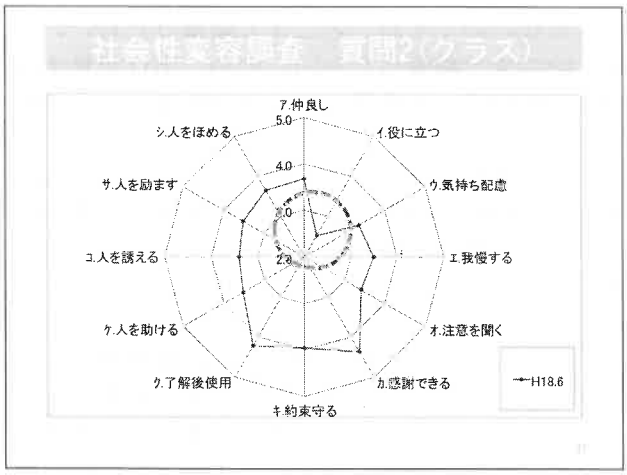
【以下、平成24年のシンポジウムのビデオ視聴】

多くの公立の中学校がそうであると思いますが反社会的な問題行動や不登校等の生徒指導上の問題を抱えていて、その事後対応にかなりのエネルギーを費やしていました。教職員は大変疲弊していました。ものすごく頑張っているのですが、よくならないのですね。どこまで頑張ったらいいのか、いつまで頑張ったらいいのか、出口が見えないような中で、子供達にどんな力を付けたら学校がよくなるのだろうと研修会を行ったわけです。たくさん意見が出て来ました。もちろん、10個や20個ではありません。基本的な生活習慣に関わるものとか、学力に関わるものとか、たくさんの言葉が上がりました。そうやって見ていくと、いろいろな力と関わっている、子供達に付けたい力のベースになる力ですね。例えば、自尊感情とか自己肯定感とか自己有用感とかの言葉で表現されるものです。これは、自分自身が大事だという思いが非常に低いのではないか、ということに思いが至ったのです。




平成 18 年に入り、すぐに子供達の社会性を調べるアンケートを取りました。これは、自分自身に関する事です。「私は学校が楽しいです」「私は授業がよく分かります」「このクラスはいいと思います」「外で遊ぶのが好きです」と色々ありました。「私は今の自分が好きです」「私には良い所があります」ここが非常に落ちこんでいるということが分かったのです。

次に、クラスの中の社会性です。人間関係ですね。「クラスのお友達と仲良くできます。」「クラスの人の役に立つ事ができます。」「クラスのお友達の気持ちを考えることができます。」「クラスのお友達のために我慢することができます。」もう色々あるんですね。やはりこの「私はクラスのお友達の役に立つ事ができる」「自分は人の役に立つ存在だ」という自己有用感というものが非常に落ちこんでいることが分かりました。




それは、下級生に対してもそうなのです。下の年齢の子の役にも立てない。さらに、そんな子達ですからもちろん大人の役にも立てないと思っているわけです。

それで、やっぱりここなんだ、どこから手をつけていいか分からないけれども、ここから手をつけていこうかという事になったのです。人の役に立つ活動を学校教育の場で提供して、「自分は人の役に立つな」「自分は捨てたものではないな」といった感情を育てて行こうということです。それまでも、中学校３年間、本当にいろいろな取組をしっかりやっていました。しかし、今、思い返しますと、一つ一つの取組がバラバラなのです。繋がっていません。３年間を通じて「この力」というようには繋がっていませんでした。

さらに教職員も何十人かおりましたが、「自分はここで勝負したい。」という、それぞれの思いもバラバラだったと思います。そこで、校内の教職員が一致団結して、３年間通じてここ（自己有用感を育てること）を目標にやっていこうということになったわけです。

一年目の取組です。中学校１年生は、保育園に行って保育園児を中学校に招き、お世話活動をしようということになりました。この写真は、私達にとって大変衝撃的な写真でした。「この子達が一列に並んで歩けるなんて！」この子達が一列に並んで歩く姿を見たのは、これが本当に初めてでした。本当に感激しました。それまでは、何処へ行くにも「はい。一列になります。二列になります。」と言っても、２～３歩進んだ時には、もうバラバラになっているのです。ですが、小さい子供達をどうやったら安全に連れて来ることができるかなと、中学生に考えさせて、それを実行させたところ、きちんとできたわけです。

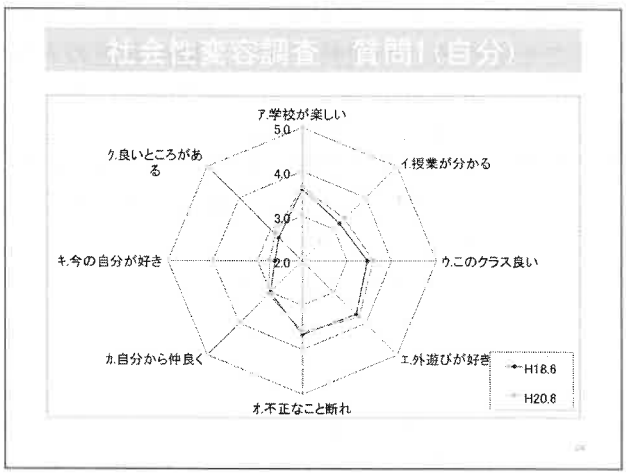
お世話活動で私達が大切にしたポイントが幾つかあります。まず一つ目は、「全ての子供の自己有用感を育てる」ことです。たくさんの子供達がおりますが、一部のリーダーの子達が育つのではダメです。全ての子ども達に何か役割が与えられ、その役割をまっとうすることで「自分は役に立ったな」という感情を育てるのです。

二つ目は、「この取組のプランニングは子供がす

る」ということです。私たちが「さあ、保育園に行きますよ」「〇〇ちゃんが待っているからね」「〇〇さんと〇〇さん。一緒にここに来て、お世話してね」ではダメなのです。「やらされている」「一応、感謝されたけれど別に先生がやったことだから…」ということになるのです。これがすごく大変なんですね。時間が掛かります。子供達がやる事ですから。でも、時間が掛かりますけど、子供達にプランを作らせるんです。

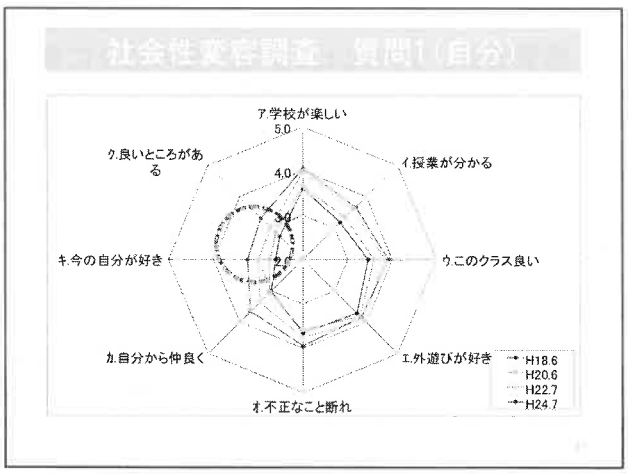
子供達のプランですから上手くいかないこともあるのですが、ここが一番大事です。最後、「十分に褒めてやる」ことが大切なのです。「よく頑張ったね」「みんなが考えてやった事が保育園の人達にどれだけ喜んでもらえたか」ということを伝えます。保育園の園児さんからも伝えてもらいますし、保育園の先生からも褒めてもらいますし、地域のおじさん、おばさんに褒めてもらったりとか、他学年の先生からも褒めてもらったりとか、ＰＴＡの会長さんからも、まあ少し大げさですけれども。とにかく、ありとあらゆる手段を使って徹底して褒めました。

すると、子供達が「自分達がやったことが本当に役に立ったんだ」という思いになり、これを３年間積み上げることで、いろいろな問題行動が改善するといいなと思っていたわけです。すぐに効果が表れました。どのような効果かと申し上げますと、学校全体がフワッと温かい雰囲気に包まれました。漠然としたものなのですが、「ああ、学校が何かホンワカしてきたわ」という感じでした。教師と生徒達の関係もよくなり、今までは「こうしなさい」「ああしなさい」ばかりだったけれど、褒める機会も多くなりました。




ところが１年目の自分に関する調査です。20年の６月です。全然ダメなのです。学校の雰囲気がよくなったという実感はあるのですが、具体的に数値として表れません。学力も上がりませんでしたし、不登校の数も減りません。もう本当にガッカリしてしまい、どうしたらいいのだろうという中で、「これは中学校に入ってからでは遅いのではないか」という議論が出てきたわけです。中学校の３年間だけでは、やっぱり無理なのではないか。小学校にお願いをして、小学校と連携することで、小学校でまず６年間十分育ててもらい、その子達を私達が受け取り、その上にまた次へ取り組む、積み上げていくという連携が必要なのではないかという思いに至り、小学校の先生方にお願いしたわけです。「本当に中学校は困っています。とにかく協力して欲しい。」そして、データは全て提示致しました。学力のデータも不登校のデータも全て提示致しました。

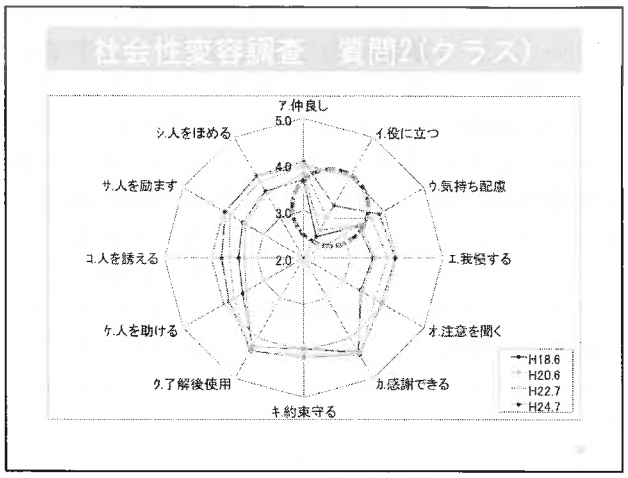
後に小学校の先生にお聞きしたのですが、やはりこのデータは非常にショッキングだったと聞いております。「やっぱりこれはあかんぞ。中学校、本当に困っているんだ。」多分、中学校の為というよりも自分達が手塩にかけて送り出した子達が困っているということで、２小１中だったのですが、二つの小学校が本当に連携してこのお世話活動に取り組んでくれたのです。




その結果です。そうやって小学校でお世話活動を体験した子達を受け入れて、初めて中学校のデータが上がって行くのです。これは２年前ですね。さらに今年の１月ですね。まだ上がり続けています。特にこの「自分には良いところがある」「今の自分が好き」ここが上がっていくんですね。

次が、クラスの人間関係。「役に立つ」が大変落ち込んでおりました。中学校だけで頑張ってもダメだったのですが、ようやくここまで４年掛かるわけですが、小学校でしっかり取り組み、子供たちを送り出してくれる。それで中学校のデータが上がって行くのです。今年またさらに上がっております。この大きな落ち込みも、まだ落ち込んでおりますが、やや緩やかになっているように思い

ます。「下級生の役に立つ」も同様です。「大人の役に立つ」も同様です。




このように小学校と中学校が同じアンケートをベースにし、アンケートの結果を検証しながら、お世話活動に取り組めたところ、このように上がっていったのです。さらに、平成 22 年はさらに上がり始めました。しっかりと社会性を身に付けた子を受け取る事ができて、中学校の教員はそれまで事後対応に追われて疲弊しておりましたが、次のステップに進むことができるようになりました。授業改善、学力向上ですね。その辺りに着手し始めた頃からいろいろな効果が出てきたなという実感があります。元々、いじめを減らそうと思って取り組んだことではないのですが、その結果、学力が上がり、いじめが減ったということです。【ビデオ視聴、ここまで】

## ○まとめ

準備してきたスライドもほぼ終わり、後は質疑応答の時間かなと思っています。30～40 年くらい前、既にこの学校保健会というのは存在していたと思いますが、その頃と今とでは何が違うかというと、その頃の方が学校はしっかりしていました。同時に家庭もしっかりしていました。だから、学校が１から教えなくても、子供達は地域や家庭で育ってきて、１、２、３くらいまで育ってきている子供達を前提にして４、５、６くらいから始めていけば済んでいました。このような段階で、さらにそこの中でも少し病気がちな子達のケアも、みたいな話だったと思うのです。

今は多分、１、２、３までも育っていない子供達が、まず学校に入ってきます。しかも、そういう子供達に４、５、６くらいから始めるような授業スタイルをそのままもって行く先生も割といますので、どうしてもそこでいろいろな不具合が起きてきます。その不具合が起きていることを、まるで個々の子供の責任みたいな格好で解消しようとします。お医者さんなどにも関わってもらって一生懸命にするんだけれど、今ひとつうまくいきません。そこで、さらにもっととやっていくのですが、そもそも育つべきところが育ってないということこそが問題なわけです。

例えば、お世話活動に取り組む中で、６年生らしく責任を持ってできるようになったと感じた子供達は、中学校に行っても、しっかりとおとなしくやっていけるのです。ところが、６年生の時までにそうした体験もなく、反対に「学校に行ってもおもしろくない。」といった格好で不登校になる子供が５～６％いる状況。不登校になった子供もそうだけれど、それ以外の子供も、似たりよったりです。「学校なんてこんなものや。」と思って登校してきています。その子達に中学校がいくら熱心に働きかけても数字は改善しない。そういうことなのです。

ところが、小学校の段階からその子達にそれなりに活躍させながら、その学年として期待される行動に気が付かせていくことだけでも変わっていきます。専門家に対する要請も、安易に受け入れて協力するのでなく、むしろ突っぱねて頂くというか、突き放して頂く。「申し訳ないのだけれど、まず(学校の)先生方でこれやって下さいよ。その上で、私達もお手伝いします。」みたいに距離を置かれる方が、結果的に子供にとっては上手くいくのではないでしょうか。

ただ、今はすごく大雑把なことしか言っていませんので、個別の学校の状況を見ていかないと、そんなにいい加減なことは言えないのですが、ただ全体的な傾向として言うと、少しその辺の距離の感覚みたいなものを変えていくという作業をしていかないと。だから本来、(学校の)先生がやるべきことをやる。小児科医なり、精神科医の人がやるべきことをやる。では、その間はどう埋めていこうという話だと思いますが、今みたいに「医者の発想」をそのまま学校に持ち込む、みたいなことをズルズルやっていくと、多分まずいだろうなという印象を持っています。

以上で私の話は終わりにします。どうもありがとうございました。

滝先生どうもありがとうございました。それでは、せっかくの機会で御座いますので、滝先生に何か質問が御座いましたら挙手の方をお願い致します。

（質問）

○○と申します。お話ありがとうございました。本当に参考になりましたし、どちらかというと本

当に部分的なことばかりを見ていたのだなというような感じで先生のお話を伺わせて頂きました。

質問なのですが、先生のお話の中で集団指導と個別の対応という所で、今一度、集団指導がしっかりできた中での個別指導をというような視点でお話頂けたと思っています。まさにそこに問題があるというふうにも捉えていますが、その中の今日のプレゼンの中で、集団指導のあり方を見直すんだと、絵で言うと小さい円が大きくなって、みんなを包括していくような円になったわけですけれど、これを具体的に広げるというのは、何をどんなふうに広げるというその中身を少し教えて頂けると、集団指導を今までは、こうやっているんだけれど、それをやっぱりこういう形の広げ方をすることで個別に対応しなければいけないと言っていた子達も、もしかしたら包括できてしまうんだよというような辺りのことを少しお伝え頂けると有難いんですが。

（回答）

多分、これも本当に状況とか場面によって全然違うので何とも言い難いのですけれど。 例えば、一つはね、よくいろいろな学校でやるチャイム着席みたいなことで、チャイムが鳴ったら座りましょうといった話があったとします。そうすると、昔の感覚で言うとチャイム着席をすると学校で決めたら、できない子達には「なんであなた達はできないの！」みたいな格好でやっていたりした。例えばそういうこと一つとってみても、「全員がチャイム着席できるようにするにはどうしよう。」「特に問題を抱えている子達にはどうしよう。」と話し合って欲しい。

一昔前の発想で言うと「〇〇ちゃん、お願いね」「〇〇君、絶対に座らなあかんね」「ちょっと、チャイムが鳴りそうになったら、あなたも声をかけてあげて」というようなことをしたと思うんですね。例えば、それなんかでも集団指導を一律に、平等に公平にやらなければいけないとみなさん思いすぎで、昔なんてそういう不公平なことをいっぱいしていたはずなんですね。僕の子供の頃なんか本当にひどくて「〇〇ちゃんはね、違うの！みんなと！ だから一緒になんてできないんだからね！あんた達もっと面倒みなきゃダメでしょ！」と叱られた記憶もあります。今、そういう事を公言しにくいので、みんな平等にとやってしまう。すると、子供達は逆に「なんで〇〇ちゃんはできないのに先生は叱らないの？」といったようになってしまう。そのあたりのやり方をどうするかです。もし面倒見のいい子がいればそんなやり方もあるし、あるいは一律チャイム着席というのではなく、「〇〇してから着席するようにしようか。」みたいに約束を決めることで、よくいうユニバーサルデザイン的な発想で、ただ口で言うだけでは分からないから、行動をわかりやすく、もっと明確にしましょうといったやり方もあります。

どちらかというと、平等とか公平と言って一律に何かをやろうというよりも、そこに幅があってもいいし、子供同士をもう少し使うという手もあると思いますね。できる子供とできない子供とを分けてはいけないかのように思っていますけれど、そうではなくて、できる子供はこの子の面倒を見ることを通してさらに育つことができるし、この子供はこの子供で「〇〇君がいてくれるから安心できる」みたいに。「公平感」を大切にすることよりも、「安心感」を大切にしてスタートができることってすごく重要です。それだと、いつまでもそればっかりになってしまうと言うのであれば、一学期のうちはそうだけれど、二学期になったら少し一人でやってみようかといったやり方もあるでしょう。一度決めると、もうその通りでなければいけないといった固定観念でやり過ぎているようなところが割りとありますので。

さっきの子供に決めさせる、ということで言えば、集団のルールを決めるとき、先生が無理矢理というか一方的に決めることが多いのですが、子供達に「じゃあ、あなた達は、どうしたら守れるの？どこまでだったら守れるの？」といったことを投げかけてみるとかね。その時に、例えば、「でも、この中には、先生誰とは言わないよ。でも、できない子もいるよね。できない子がいた場合は、みんなどうするの？」すると、「助けてあげればいいじゃん。」とか言い出す子も中にいたりするわけです。そういうところを上手に使える先生って、今でも僕、岐阜県で時々見させてもらうと上手い先生は上手いです。本当に。上手にそれができていくのだけれど、そういう先生達の知恵とかノウハウが伝わっていかないことが、すごく問題なわけです。やっぱり、もっと子供達を活躍させる事のできる先生達の授業をいろいろな人達が見られると、さっきも言ったような形式的な話ではなく集団指導というものがもっと豊かになります。集団の中で子供を育てることができるんだろうなと感じます。